

考古学と音楽教育の連携

—中根八幡遺跡の縄文土器と音楽づくり—

中村耕作・早川富美子
國學院大學栃木短期大学

子ども向けの体験発掘に合わせ、考古学と音楽教育の教員・学生による縄文土器をイメージした音楽活動を行った。また、小学校に縄文土器を持ち込んで、約80人の全校児童とともに音楽づくりを試みた。両実践とも、土器の器形や文様のカタチ・リズムを読み取ってもらうこと、それを当時あり得たであろう様々な自然素材（木の実・貝・骨・石など）を用いることを柱としている。

これまでの実践を経て、完形の縄文中期の土器の観察という考古学的目標はほぼ達成した。一方で、中期以外の土器や土器破片を利用するには課題が多い。

自然素材を用いる実践は、音を出すまでは好評だが、大きな音が出ないこと、音程を変えられないものが多いことから、「音楽」をつくるには課題が多い。

現状と課題

①考古学における音楽

- ・楽器の考古学的研究（弥生時代以降が主）
- ・縄文楽器は土鈴を除き、その実在性が不明瞭（土笛・石笛・土器太鼓・木琴）

②博物館・遺跡公園における音楽

- ・館内に復元土器太鼓を置いたり、縄文まつりで使用
- ・東日本の博物館で「銅鐸を鳴らしてみよう」
- ・新潟県立歴史博物館の「縄文サウンドスケープ」展示
- ・遺跡のイメージソング、考古学エレジーなどの演奏
- ・アーティストによる縄文楽器演奏（太鼓・笛など）
- ・アーティストによる土器文様の譜面化

③音楽教育における古代の楽器

- ・「弥生の土笛」は人気メニュー（図工等とも連携）

強い印象を与え、古代へ想いをはせるきっかけとなる

v(^^*)

(^^♪!(^^)!

考古学的実態にそぐわない活用例だ

(—)

(^・ω^)

(^ー^)/

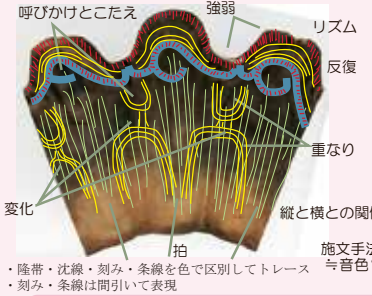
美術・造形分野では多くのアーティストが新たな価値を生み出しており音楽分野でも意義ある試みだ

縄文土器と音楽の共通点：規則化された精神文化表現

小学校の音楽づくり（小学校学習指導要領）

- ・設定した条件に基づいて、即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能
 - ・音楽の仕組みを用いて、音楽をつくる技能
- [共通事項] 「音楽を形づくっている要素」
- ア 音楽を特徴付けている要素
音色 リズム 速度 旋律 強弱 音の重なり 和音の響き
音階 調 拍 フレーズなど
- イ 音楽の仕組み
反復 呼びかけとこたえ 変化 音楽の縦と横との関係など

下記実践2で使用した土器の一例（本発表用に中村作成）



縄文土器の構造分析のモデルであるレヴィ=ストロースの神話分析は、西洋音楽の構造を参照しています

学生による当日の実践記録



実践1 体験発掘とセットでの実践

コンセプト

- ・体験発掘後に本物を使った表現活動
- ・縄文生活にあった自然素材（木の实・豆・貝・骨・石）を使用（太鼓・笛も使用）
- ・教員養成課程とのコラボレーション

考古学からの目標

- A 発掘学習
掘内の様子などにより遺跡(大昔の人が使った場所)がどんな場所かを知ることが出来る
- B 縄文生活
1 縄文時代は縄文土器(大昔の人が使った土器)が、今やなくなってしまったことを知る
2 土器は様々なものを土で焼いた土器であることを知る
- C 高土器
1 縄文土器は土器なのに、様々な形や文様があり、高土器の形が特徴的であることを知る
2 縄文時代は、高土器の形や文様を後世の器から得ていた時代であることを知る

音楽教育からの目標

- D 縄文時代の自然素材などを用いて、当時のことを想像しながら音を出す工夫をする

今回の学び(A~D)を、自分なりに理解して表現する

対象

- ・県主催子どもの未来創造大学の一環としての本学開講講座「縄文遺跡を発掘しよう!」に応募した県内小学3年生~6年生
- 2016年度20名・2017年度19名

実践の流れ(2017年度)

- ・体験発掘、土器洗浄・拓本(各60分交替制)
- ・音楽づくり 20分



土器を音符に見立て、自分の土器の箇所まで音を出す(2016年度)

時計に沿って班単位で順に音を出す(2017年度)工夫の例

- ・凹凸⇒スタカートで叩く
- ・文様の線⇒土笛シュッと吹く
- ・土器の点々⇒貝と貝を合わせる
- ・隙間の幅⇒音を出すタイミングを考える
- ・凹凸が少し波打っている⇒交替で音を出したり、だんだん速くしたり、音の高低をつける
- ・模様は波と刻み音をつける



(『文化財報』35、『國學院大學栃木短期大学紀要』53)

実践2 小学校表現活動交流会での実践

コンセプト

- ・13年目となる短大と市内の小学校との交流会に組み込む
- ・本物の土器、自然素材の利用という特徴は継続
- ・短大の考古学教員・音楽教育教員、小学校教諭、音楽教育研究者で内容を検討

対象と方法

- ・市内の小規模小学校 全校生徒約80名
- ・9月と2月の2回、それぞれ2時間程度実施(社会・音楽の授業として換算)
- ・考古学の教員・学生が縄文土器を説明→班ごとに土器を観察し、自然素材で表現

2月の実践(2018年度)

- ・9月の反省をふまえ、土器片ではなく市内出土の略完形土器とその展開写真を使用(本学園参考館より5点、栃木市藤岡歴史民俗資料館より3点)

事前準備(短大)



文様トレース(当日は写真を利用)

事前準備(小学校)



現代楽器でも演奏

事前準備(小学校)



文様をオノマトペで表現(6年生)



施文体験(全学年)

当日



サポート学生による成果と課題の分析

- ・土器や、骨・石などを用いて音楽づくりをする機会はめったにない
- ・文様を見て、繰り返し、色の変化など発見することができた
- ・どのように模様をつけたのか、どんな規則性があるのかなど更に細かい所まで見ることができた
- ・実際にあったものを使うことでイベント全体の雰囲気良かった
- ・自然物から出る美しい音を自分で出すことができる
- ・自分の音を見つけようとし、どんな音が合うのか考えながら楽器を組み合わせていた
- ・自分の発想を試す楽しさを味わえる
- ・問題解決型学習の1つの方法として効果があった
- ・児童は様々な視点から模様を見ている
- ・土器の本来の用途ではない
- ・比較という考古学において大切な作業がなかった
- ・土器の取扱い
- ・文様を読み取っても、音楽材の選択や表現方法が難しい
- ・音がワンパターンになりがち
- ・音の重なりや強弱の表現が難しい
- ・恥じらいや知識不足で取り組み難しい児童がいた
- ・一斉に鳴らして終わるだけの音楽になってしまった
- ・短大生が例を見せたら分かりやすかったかもしれない
- ・考古学と音楽教育を合わせるねらいがわかりにくい
- ・教材研究の困難さと教師1人ではとても表現不可能である

- ・土器の観察という考古学的目標はほぼ達成
- ・自然素材から音を出す楽しさは味わえている
- ・素材の制約で音楽としては限界がある
- ・考古学と音楽との連携の意義が理解されづらい

本実践は、日本音楽教育学会プロジェクト研究「学校と社会を結ぶ音楽教育」、栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業「とちぎの古代遺産新発見Ⅲ」の活動実践を兼ねる

児童のプライバシー保護のため撮影ご遠慮ください(ご希望の方には縮小版をお渡します)